南ア

釜無川　黒川•黒津沢～鬼の窓沢下降

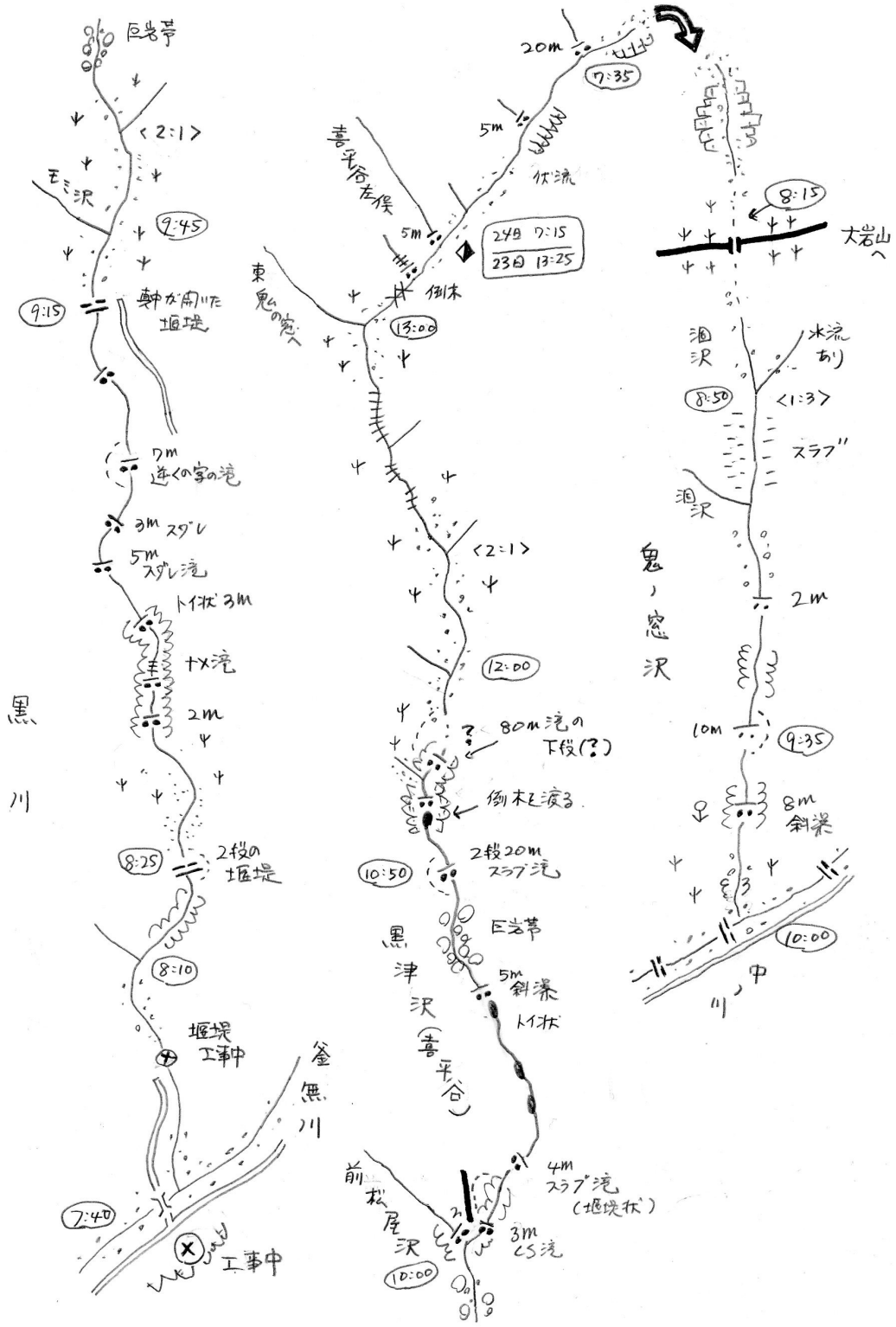
メンバー:三井(L、記録)
　　中島(ワラジの仲間)
遡行日:10 年 10 月 23 日～24 日

「黒津沢」(「登山大系」では黒津沢は誤りで「喜平谷」が正しい、とあるがここでは地形図に表示の黒津沢としておく。)は、地形図の「甲斐駒ケ岳」で周辺の沢を調べている時に目についた。
右俣をつめ、コルにでて反対側の「鬼の窓沢」を下降すれば、1 泊 2 日で丁度いいコースになりそうだ。
今まで耳にした事はない沢で、「登山大系」を開いてみると、ゴルジュや 80mの滝が記されていて興味を引く。
ネットで検索してみるとヒットはしなかった。殆ど遡行はされる事はないのだろう。
その時はいずれ行ってみようか、という程度の思いだけだったのだが最近、別な記録をネットで検索している折に偶然、今回考えたルートを遡行した記録を目にして俄然、その気になり、中島さんに声をかけ、計画を具体化した。
ただ、ネットの記録には林道の車止め付近では車上荒らしが多い、と書かれているのが妙に気になった。今まで林道などでの車上荒らしの事は何度か聞いていたが、余り気にした事はなかったのだが。

＊　＊　＊　＊

前夜発、という事で中島さんと落ち合うと開口一番、その車上荒らしの事をいわれた。中島さんは別の記録に書かれていたのも見たとの事で心配顔。
車の荷台には前泊用のテントを始め、普段から色々積み込んである。
僕も嫌な予感がしてきて、急遽予定を変え、中島さんを伴って家に戻ると、前泊用の装備など含め、荷物は一切合財、車から降ろし、家で仮眠して早朝家をでる。
釜無川林道のゲート前に到着すると既に 3 台の車。1 台の車の横で登山服姿の人が出発の用意をしていた。話をしてみるとここから鋸岳に日帰りで登るという。他の 2 台の車もそういう登山者の車だという。車上荒らしの件は聞いていない、と言っていた。
工事用のトラックが次々と通過していく。ここは林道というより、工事用道路で、時僕たちも支度を済ませると車を後にする。
車道を 1 時間ほど進むと黒川の出合いに出る。ここは大きな工事現場があって、釜無川の左岸側で大規模な斜面の崩落防止の工事をしていて、黒川側も堰堤工事をしている。
黒川沿いの車道を歩きだすと現場事務所の人から声がかかる。
「どこに行くの。道なんてないし、この先工事中で、その先にも大きな堰堤があって通れないよ。」
「僕らは沢登りなので道はなくても大丈夫です。堰堤は巻いて行きますから。」などとやり取り。
現場事務所の人は沢登りというのが判らないようで、怪訝な顔のまま「まー、気をつけて行ってください。」とお許しがでた。
確かに直ぐ先で堰堤工事が行われていた。堰堤を越えた所で沢靴に履き替える。
暫くは平凡な感じで沢は流れている。水量は少ないようだ。ゴルジュの通過も問題はない。
2 段になった巨大な堰堤が現れる。これが現場事務所で言っていた大きな堰堤だろうか。左岸側から越える。バックウォーターは水がなく、砂地がでている。
ゴルジュとなり、小滝やナメ滝を越え、スダレ滝を過ぎると 7mの逆くの字滝。左岸側のかなり上にガードレールがみえる。右岸の急な草付きから巻くが残置ロープが垂れている。
越えた先にまた大きな堰堤が。
閉まりかけの門扉のように、真ん中が 3m程開いた堰堤で、ここまで林道(工事用道路)が続いていた。
右岸に樅沢を分けると 2:1の二俣となる。巨岩帯を過ぎると狭隘なゴルジュで二俣になっている。左俣は「前松尾沢」で、25mの滝を落と

している。右俣は登りにくい 3mのCS滝。二俣の間の急なリッジに取り付いて巻く。
4mの堰堤状のスラブ滝、5mの斜瀑などを越えると再び巨岩帯となり、巨岩の乗っ越しの繰り返しは中々しんどい。
2 段 20mのスラブ滝を右岸から巻くと小ゴルジュ。奥に小滝があり、手前はトロになっていて滝に倒木がかかっている。
水量が多ければ全身びしょ濡れで通過、という事になろうが幸い、その倒木を伝って濡れずにトロを渡ると、大きなスラブの滝が立ち塞がる。
この辺りが地形図に滝記号があるところで80mの滝があるはずだ。しかし、ざっと2.30m位だろうか。とても 80mはない。ともかくこいつを越えなければならない。
直登は無理。右岸の急な草付きから上の潅木帯に入るしかなさそう。しかし、その潅木帯に入るまでの草付きが余りよくない。
念の為ロープをつけ、取り付くがやはりやばいのはその部分だけで、潅木帯をぐいぐいと登って沢床に降りる。
その高巻きで中島さんの高度計では 60mか70m位登ったらしいが、すると滝は何段かになっていて80mという事なのか。その点は瀑水沿いに登らないとなんとも言えないが。
僕は 80mのストレートの滝をイメージしていたのでどうにも拍子抜けの感じ。
そこから沢は全く平瀬の穏やかな沢となる。奥秩父の沢の様な小滝混じりのナメ床を辿って行くと沢は右に 90 度に折れる。
少しゴーロっぽくなった沢を詰めていくと、右岸側から沢が入るが、これは大岩山に突き上げるもので、右俣の左岸側に一段高くなった平らな所があり、流木も豊富なので時間は早いがテン場とする。
今年は紅葉が遅いとの事だが、さすがにこの辺りまで来ると周辺の木々は秋色に染まっている。まだ冷え込みがないせいか鮮やかな赤色がないが。
先に目をやると、稜線を削り取ったような鬼の窓のコルが指呼の距離で見える。
泊まりの沢は今年はこれが最後だろうか。焚き火を囲んでいろいろと話題は途切れず、話こんでいた。
［二日目］
用心の為持参したダウンジャケットが効を奏して寒くはなかった。
中島さんの特製のトマトスープ仕立てのマカロニなどという小洒落た朝食（ワラジではよく出るらしい。）を食べて本日もスタート。
暫く遡ると沢は狭い急なルンゼとなる。両岸は垂壁状で、特に左岸側はボロボロで落石がありそうでやばい。
ザレたルンゼを暫く登ると傾斜が落ち、樹林の尾根となって鬼の窓と呼ばれるコルに上がる。
振り返ると樹林越しに八ヶ岳がよくみえる。小休止して反対側の鬼の窓沢を下降する。直ぐにルンゼ状になり、判りやすい。
しかし、何かいわくありありげな名前の沢だったが殆どどうという事もなく、小滝と 10m位の滝が 2 本あるだけであっさりと「中の川」の本流にでた。
広い河原となっていて、大きな堰堤があった。垂直尾翼を等間隔で並べたような変わった堰堤で、見ると下流にも上流にも堰堤があり、下流のものは太いパイプを組んだもので、上流のそれは普通のコンクリート製で、何やら堰堤の展示場というような感じすらして、呆れるような光景だ。
この中の川の上流には「七つ釜」と呼ばれるゴルジュがあるのだが、堰堤を何処まで造ろうとしているのだろうか。埋められなければいいが。
中の川を下るつもりでいたのだがこの状態ではその価値も意味もない。
沢の装備をはずすとズックに履き替え、車を置いたゲートに向かって下って林道を下った。
林道歩き 3 時間でゲートに戻った。心配した車は何事もなく、それはよかったのだが、こんな心配をしなければならないとは…世も末か。



10年10月23日～24日
南アル 釜無川・黒川・黒津沢～鬼ノ窓沢